中学校教員の不登校支援の現状と課題

－X市を対象としたフィールド調査から－

学籍番号　229207
氏　　名　小川　智美
主指導教員　岡田　和子
副指導教員　水野　治久

1.　研究の背景と目的

1.1 時代の変化と不登校

文部科学省（2023）「令和 4 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、不登校児童生徒の人数が 10 年連続で増加、過去最多であり、調査結果を踏まえて不登校対策「COCOLO プラン」を進めていくことを示している。学校には校内教育支援センター（以下、校内別室）を設けることが望まれている一方で、不登校増加の背景には、新型コロナウイルス感染拡大防止にかかる措置以降に学校を休むことへの抵抗感が減少したことや教育機会確保法の浸透も指摘されている。校内別室設置を進めていく前に、教員が学校で生徒に関わることの意義とは何かという疑問が湧いた。本研究は、登校することの是非や学校や教員の役割は何かという実習者の疑問をできるだけ明らかにしていくところから始めた。

1.2 研究の対象と目的

X 市の中学校の不登校生徒数も国と同じような増加率を辿っている。校内に別室を設ける中学校が増えているが、具体的な運営は各学校に任されている。そこで X 市立中学校の校内別室の運営において提案できることを整理したいと考えた。予備的調査と富田・加藤（2021）を参考に、別室の協働的運営における影響要因に「教員の要因」と「学校の要因」があると考え、「教員の要因」に注目したリサーチクエスチョン「中学校教員は不登校生徒をどのように支援しているのか」を設定した。そして本実践研究の目的を⑴公立中学校の校内別室に通う子どもの支援を全教員で取り組む際に、教員の意識における阻害要因を明らかにすること、⑵教員の協働的関係構築の視点から、校内別室設置を進めるために必要なことを整理していくことの２点に決め、量的・質的研究を行うことにした。

2.　調査と結果

X 市立 A 中学校、B 中学校、C 中学校、D 中学校の教員に協力いただき、質問紙調査を行なった。99％の教員が，「不登校生徒に寄り添いたいと思う」に肯定的に回答し、97%の教員が「支

援したいと思う」に肯定的に回答しているが，20%の教員が「不登校対応は面倒だと思う」と回答した。加えて，19%の教員が「不登校生徒はわがままだと思う」に肯定的に回答している。約2割の教員が「寄り添いたい」「支援したい」と思いながら、「わがままだ」「面倒だ」と思うという結果が出た。さらに職種別にクロス集計をすると、「寄り添いたい」「支援したい」と思いながら「わがままだ」「面倒だ」と思う担任の割合が約3割であることがわかった。

インタビュー調査では、学級担任が自分の経験に基づいた不登校支援を行っているケースが多く聞かれた。支援の方法は、生徒や保護者との関係を築くところから始め、会話の中から本人や保護者の要望を聞き取り、生徒ができることから少しずつ始めていくという方法をとっているようであった。試行錯誤しながらの支援で、先の見えない閉塞感を感じることもあり、また時間をやりくりしながら支援を行っているため、物理的・心理的負担も大きいと感じていた。そんな中での支援の原動力は、子どもたちの笑顔や成長期の３年間に関われる教師としての喜びなどであった。不登校支援を面倒だ・不登校生徒をわがままだと思う担任の実態は、支援を拒んでいるわけではなく、生徒に関わる中で生じる葛藤が関係しているという結果となった。

3.　考察

量的・質的研究により、不登校生徒の対応に関する考え方や方法は教員によってさまざまであることがわかり、不登校支援の阻害要因の一つに、視点の違いがある可能性を考えた。「集団指導の視点」はできていないことが気になり、「個人支援の視点」はできていることに気がつきやすいというどちらも教員が持ち合わせている視点である。教員がどちらの視点で見るのかは、不登校生徒や保護者との関わりを通して考えている支援の方向性、教員自身の経験や信念、業務の多さと時間の無さからくる「教員の葛藤」などが関係していることが示唆された。

教員の不登校支援の役割として、不登校生徒の現在の様子から背後に隠れた不登校の要因を探り、不登校がリスクになるのかあるいは積極的な意味を持つのかを判断することが求められている。さらに、不登校生徒が心を開いて自身と向き合いながら外に関心を持つためのさまざまな刺激を、生徒の過度な負担にならないように行なっていく必要があると考える。質的研究からも、この役割を学級担任が担おうとしていることが表れていたが、学級担任の責任感による抱え込みと他の教員の遠慮によって、協働的な不登校支援が阻害されているとも考えられた。

4.　結論と課題

中学校教員の不登校支援についてフィールド調査と考察から、校内別室に通う子どもの支援を全体で取り組む際の教員意識における阻害要因として、視点の違いと担任が主体となって支援する支援方法の固定化が考えられた。これから協働的な校内別室運営を進めるためには、教員が指導と支援の視点を使いこなすための新たな知見・情報が必要になるのではないかと考えている。